(様式１)

平成２７年９月３０日

陸前高田市議会議長　伊　藤　明　彦　様

会派名　　新政会
代表者職氏名　　会長　佐　藤　信一　㊞

政務活動概要報告書

政務活動費に関する取扱要綱第６条第２項の規定により、平成２７年度政務活動の状況について報告いたします。

記

Ⅰ．調査事業

(1)実施日　平成 27 年 6 月 1 日(月)～4 日(木)

(2)場　所　北海道礼文町役場、航空自衛隊稚内分屯基地、ノシャップ岬、宗谷岬国立公園、余市水産博物館、ニッカウイスキー余市蒸留所

(3)参加者　会長　佐藤　信一、顧問　小松　眞、幹事長　清水　幸男　3 名
(新志会　菅原　悟、佐々木一義、鵜浦昌也、菅野　稔、伊藤明彦 5 名同行)

(4)調査の概要

6 月 1 日(月)　陸前高田市 6:30 発～花巻空港 8:55 発～新千歳空港 09:55 着
～14:00 利尻島着

6 月 2 日(火)　礼文町役場訪問
稚内自然保護官事務所　自然保護官　原澤翔太氏
礼文町産業課観光 G　主幹　川村　長氏
礼文町役場　産業課主査　竹中俊一氏

役場内の会議室で 3 氏によるプロジェクターで利尻礼文サロベツ国立公園と礼文島の取り組みについてと礼文島いきものつながりプロジェクト助成金交付について説明をいただきました。

利尻島の概要

北海道北西部にある標高 1,721m、周囲約 60ｋｍの円錐型の島、亜寒帯気候に属し、強い季節風が吹き、地形はコニーデ型火山地形。ポン山等の側火山、中腹以上では侵食が進み、深い谷と鋭い屋根が発達し、頂上付近はガレ場となって、利尻島には河川がほとんど見られなく、山麓部には湧水が見られるほか沿岸の海中からも湧水があり、漁業を潤している(特にも利尻こんぶが有名)。

陸前高田市議会

利尻礼文サロベツ国立公園の概要

・日本最北の国立公園

・指定　昭和 49 年

・総面積　24,166ha(礼文島の約 3 倍の面積)

・年間利用者数　　67 万人(H24)

◎国立公園指定までの歩み

昭和 25 年　利尻礼文道立自然公園指定

昭和 40 年　利尻礼文国定公園指定

昭和 46 年　自然公園審議会答申

[サロベツ原野も含めて国立公園区域に編入することが必要]

昭和 49 年　利尻礼文サロベツ国立公園指定(サロベツ原野を編入)

最北の豊な自然　バリエーションに富んだ景観

国立公園としての礼文島の利用としては

・島の総面積の約半分が国立公園区域

・全長約 50ｋｍに及ぶ自然歩道が整備されており、高山植物を眺めながら歩くトレッキングが魅力

・島を訪れる約 13 万人の観光客の内、約 80%が自然歩道を利用している。

◎高山植物や自然歩道の保全管理＝礼文島の産業を支えること

その反面課題もある

①自然歩道の管理

・適正な利用と維持管理による植生保全、利用者の安全確保

・多くの関係者の「協働」が必要

②盗掘防止

・関係機関によるパトロールや普及啓発の実施

③外来種対策

・約 150 種の外来種が島内に侵入し、高山植物の生育地を脅かしている

④ササ群落の拡大防止

・ササ群落の拡大による高山植生の減少

礼文島いきものつながりプロジェクト

・礼文島が抱える諸課題

自然歩道の協働管理　盗掘防止　外来種対策　ササ群落の拡大防止等

多様な主体が島の自然を守り活かすための指針

「礼文島いきものつながりプロジェクト」

(礼文町生物多様性地域戦略　H24・3)

・生物多様性地域戦略とは・・・

生物多様性の保全や持続可能な利用のため、生物多様性基本法に基づき、都道府県または市町村が策定するもの

礼文島いきものつながりプロジェクト助成金交付要綱や礼文町における「人としぜんの関わりを考え実践することによる、いきものつながりを体験できる島」を推進するため、礼文島いきものつながり基金を設置し、条例を立ち上げた。

礼文町としては、「礼文島いきものつながりプロジェクト」に基づき、生物多様性の保全と持続可能な利用に関する施策を総合的、計画的に推進すると共に、町みずから事業者及び利用者として率先した行動を実践、町民、事業者、市民団体などの各主体が積極的にプロジェクトに取り組むことができるよう、取り組みを円滑に効果的に進めていく調整役として、島内外の様々な関係者との連携・調整を図ると共に、調整や合意形成を図る場を設定することや助言や必要な支援を受けるため、必要に応じて国や北海道との連携を図っている。

役場内での研修後、原澤自然保護官に同行し島内を視察説明受けました。

6月3日(水)　航空自衛隊稚内分屯基地へ会議室において

航空自衛隊第18警戒隊長兼稚内分屯基地司令である1等空佐　藤原弘常氏よりプロジェクターで第18警戒隊の任務と支援体制等活動の内容について説明を受け、その後、分屯基地の周辺を説明を受けながら視察いたしました。

稚内レーダーサイトの運用(J/FPS-2レーダー):レーダーサイトの運用の他に稚内分屯基地の警備を担当

作戦情報隊電波情報収集群

1961年:第18警戒群に改編　　1972年:アメリカ軍が完全撤退

1987年:J/FPS-2レーダー運用開始　　2000年:第18警戒隊に改編

わが国の防衛の基本方針・国際協調主義に基づく積極的平和主義等、研修いたしました。

その後、ノシャップ岬から宗谷岬等国立公園の現状を視察しながら稚内空港へ移動、新千歳空港経由で札幌駅

6月4日(木)　余市町内にある「よいち水産博物館」を視察

北海道百年地域記念事業の一環として建設されて昭和44年6月にオープン、地域の基礎をつくったニシン漁などの漁労具や、生活用品など、郷土資料を中心に展示している。

・江戸時代のヨイチ

アイヌ民族の住む蝦夷地「ヨイチ」には、江戸時代の早い時期から、松前藩の家臣がアイヌ民族との交易のためにやってきていたようです。

この交易や漁業は後に、年限を決めた上でお金を納めた商人が請け負って行うようになった。場所を請負った商人、アイヌ民族との交易や自らの漁業を行うと同時に，蝦夷地へ出漁した漁民の監視もしました。

・海の道

江戸時代から明治時代まで、人や物資を運んだ主役は海上輸送でした。船絵馬は航海の安全を祈願して神社に奉納されたもので、余市町に残るのは多くが北陸地方を母港とする船。

・陸の道

幕末には幕府の命を受けた商人らにより、海岸線や山越えの道路が開削され、「わにぐち」は工事の安全やなくなった家族の冥福を祈るために、ヨイチ場所に足軽としてつとめていた桐ケ谷太兵衛により奉納されたもの。(町指定文化財)

・ニシンの豊漁

ニシン漁の活況は江戸時代から昭和 30 年頃まで続きました。この「湯内漁場盛業鳥瞰図」をはじめ、明治時代のにぎやかな漁の様子が描かれた絵図が残されている。

モッコや丸胴・角胴・恩受書(ヨイチリンゴ)等たくさんの展示品があり、昔の浜の様子が見られました。

その後、ニッカウイスキー余市蒸溜所へ移動

大正時代半ば、日本ではまだイミテーションウイスキーが主流だった頃、「日本で本物のウイスキーをつくる」という夢を抱き、単身スコットランドに渡ってウイスキー作りを学んだ。

彼こそが、ニッカウイスキー創業者・竹鶴政孝。ひたむきに学ぶ勉強さは、かつての英国首相に「頭のよい日本の青年が、1 本の万年筆とノートでウイスキーづくりの秘密を盗んでいった」と讃えられたほど。

帰国した後もさまざまな苦難を乗り越え、日本のウイスキー産業の普及に貢献した。彼の「本物」への熱い思いは、今もニッカウイスキーで働くすべての人に受け継がれている。

蒸溜所ガイドツアーによる工場内説明を受けながら視察研修を行いました。乾燥棟(キルン塔)～粉砕・糖化棟～発酵棟～蒸溜棟～混和棟～一号貯蔵庫～旧事務所～リタハウス～旧竹鶴邸～ウイスキー博物館等見聞しました。